

ニーニョと私の物語

メキシコ、ミチョアカン州の州都モレリア市からバスに揺られることおよそ 2 時間、針葉樹林に覆われた山間を進むと、T 村の教会が左手遠方に見えてくる（写真 1）。



（写真 1） T 村遠景

私の調査地である T 村の標高は 1980m。山に囲まれていて、夏でも朝晩は冷え込む。T 村は豊富な湧水と温暖な気候に恵まれ、現在までトウモロコシや豆類、アボカド、チェリモヤ（写真 2, 3）が栽培されている。多種多様な植物は、村人の自宅にも自生している。春には村役場主催でゼラニウムの見本市が開催され、広場を賑わせている。

村には、農家、自営業、教職や農作業の日雇いに従事している人が多い。村の人は都市部だけでなく、米国へ移民したり、出稼ぎに出かけることも多い。かれらは、公用語であるスペイン語を話し、プレペチャ語とよばれるこの地域の先住民言語を話す人はごくわずかである。



（写真2）巨大なチェリモヤ¹



（写真3）チェリモヤをがぶりっ

T村の住民は、その約96%がカトリックを信仰している。T村のカトリック教徒は、ニーニョ・ディオス像と呼ばれるイエス・キリストの幼少時代の姿をした像の祭りを、年間を通して13回も行なっている。信徒たちは、この聖像を自宅で世話するカルゲロとよばれる世話人役を毎年交代でつとめ、祭りはカルゲロが主催している。世話人となった家には、祭壇が用意され、参拝者はニーニョ・ディオス像に会うために、世話人の住まいをたずねる。ニーニョ・ディオス像は、毎週日曜のミサと12月24日の晩に教会へ運ばれ、イエス降誕の日である12月25日から翌年1月6日までは教会に安置される。近年ではメディアの普及により、村の外部から祭りに参加する人が増加しており、祭りの規模は年々大きくなっている。

私は、2006年に学部時代の指導教授が主催するプロジェクトに同行したことを契機にしてこのT村と関わりをもちはじめた。そのときは一ヶ月弱しか村に滞在しなかったが、幸運にもニーニョ・ディオス像の祭りを間近で見ることができた。多くの人に参加する賑やかな祭りに私は魅了された。その後何度も、ニーニョ・ディオス像の祭りをたずねていったが、2011年3月にいった時には、これまでとは違うことが起こっていた。以前は一体しかなかったニーニョ・ディオスの像が、もう一体増えて、村の中に二体の像が存在していた。村の人に話を聞くと、カトリック教会の司祭と住民との間で、像を世話する場所や管理の仕方をめぐって対立がおこり、司祭が像をもう一体増やしていたのである。二体目の像もまた、司祭の側についた住民が世話人となり、一体目の像のときと同じように自宅で世話していた。話を詳しく聞いていくと、この対立は15年ほど前に生じたもので、当時の

¹ 亜熱帯南米産のバンレイシ科の果樹のこと。スペイン語だとチリモヤ（Chirimoya）と発音する。

在村司祭がニーニョ・ディオスを世話人の家でなく教会に安置しようとして、像を教会に回収しようとしたことが発端だといわれていた。そしてこの対立は時に、夫婦や親子といった親族の間にも影響を及ぼしているという話も耳にした。

T村の反司祭派の人びとは、毎年のようにニーニョ・ディオス像が世話人の家を移動し、そこで世話されるというこれまでの慣例を続けること希望し、そのため教会と対立しているようであった。話を聞いた2011年時点では、村人たちは、昔から世話をしてきたニーニョ・ディオス像を「村のニーニョ・ディオス」（以下、村のニーニョ）と呼び、2011年に新たに用意されたニーニョ・ディオス像を「教会のニーニョ・ディオス」（以下、教会のニーニョ）と呼んで区別していた。

「村のニーニョ」を世話する人びとは、2010年以降、像を教会へ運んでいない。それ以前は毎週日曜と12月24日の晩には教会へ運び、司祭によって定期的に祝福を与えられていた。現在では日曜ミサに行く代わりに、世話人の家で村人たちがニーニョに対して祈り（ロザリオの祈り）をささげている。私はこれまで「村のニーニョ」の祭礼組織の役割や機能について調査してきたが、人びとが宗教的権威でもある教会と対立していても、「村のニーニョ」の祭礼組織を維持し、その実践を継続することを可能にしている背景のひとつとして「カルゴ」の分かち合いがあると私は考えている。

カルゴとはスペイン語で「役職、荷」を意味する。T村では「村のニーニョの世話人」というカルゴを引き受けた場合、その夫妻は一年間、祭りの主催と像の世話をおこなわなければならない。ニーニョ・ディオス像への寄付やニーニョ・グッズを販売することによる売り上げなどが収入としてあるものの、基本的にはカルゴにかかわる費用は世話人が負担する。これに加えて近年では、参拝者が増加したことで祭りの最中に参加者に提供する食事の量が増え、それに比例して負担も大きくなっている。だが実際には、村人が「人々は世話人を助ける」と語っているように、祭りのときに提供する料理の準備などは、世話人よりも村人の手によって進められている。また、村外の人も、村内在住者と同じように祭りに参加することも可能で、村外の人が毎週日曜に行なっているロザリオの祈りを世話人に代わって主催することもある。

このように、村の人びとは世話人の仕事を部分的に担当することを通じて世話人を助け、参拝者増加や教会との対立といった状況に対応し、ニーニョを世話し続けている。それは、村内の人だけに限らず村外の人も同じように「村のニーニョ」の慣習に関わり、それによって「村のニーニョ」を介した社会的な関係は村外にまで広がっている。とはいえ、「村のニーニョ」側にいる人びとは「村のニーニョ」を巡って教会と対立する一方で、「村のニーニョ」が介在しない教会の活動（たとえばその他の聖人像の祭り）の場面では教会へ出かけるし、教会側にいる人びともこれまで通りの付き合いを続けていたりしている。

それでは一体このような対立を生んでしまうような「村のニーニョ」とは、どのような像なのであろうか。



(写真4「村のニーニョ」1)



(写真5「村のニーニョ」2)

「村のニーニョ」は約100年前に外国人から村に寄贈されたといわれており、現在ではたくさんの奇跡を起こすニーニョ・ディオス像として村の外にもその名を知られている。このニーニョ・ディオスは木像で、高さは約60cmある。人びとは触るだけでなく、その腕に像を抱くこともできる。ちなみに、ニーニョ・ディオスという像はT村だけにある像ではなく、多くのカトリック教会で所有されている。ときには、店頭で販売しており、個人的にも所有することができる。だが、その姿・形、大きさなどは様々である。

T村のニーニョ・ディオス像は人々から様々な呼ばれ方をする。たとえば、ヘスス（イエス）により親しみを込めた「ヘスシート」やヘススという名前の愛称である「チューチョ」や「チュチン」、「ニーニョ」、ニーニョにより親しみを込めた「ニニート」などがある。人びとの日常的な会話や像への呼びかけには「ニーニョ・ディオス」よりこれらの愛称を用いる場合がある。

先にも書いたが、ニーニョは村人の手によって世話されている。世話人の自宅にはニーニョの部屋がつくられ、ニーニョ専用のベビーベッドも準備される。ニーニョは毎晩そこに寝かされるわけだが、その際も世話人はニーニョをパジャマに着替えさせ、子守唄とともにニーニョを寝かしつける。これまでの世話人経験者によると、夜中にニーニョがおもちゃで遊んでいる音が聞こえたり、ベッドから抜け出して遊びに行ってきたのか、または誰かに奇跡を起こしに行ってきたのか、朝起きたらパジャマのそでに泥がついていたりということもあった。そのようなことから村外の人はこのニーニョのことを「ニーニョ・トラビエソ（いたずらっ子）」とも呼ぶこともある。



（写真6）着替え中



（写真7）ある年の世話人の家

人びとは、ニーニョの祭りをおこなう、ニーニョに奇跡を願う、誓願をたてるといったような宗教実践のときだけニーニョに接するだけでなく、日常生活のさまざまな場面で、まるで近所の子のようにニーニョについて語ったり、接することもめずらしくない。たとえば、クリスマスに向けてブニュエロというお菓子を大勢の女性が作っていたときに、世話人に連れられニーニョが女性たちを陣中見舞いにやってくるがあった。このとき、ニーニョはフォーマルな服を着ていた。女性たちは作業の手をとめ、「チュチンは一人でオシャレしちゃって!」とか「きっと（ニーニョは）みんな汚い格好してるって思ってる

ね！！」などと、ケラケラ笑いながらニーニョに話しかけたり、女性同士でニーニョのことを語っていた。

私は人びとがニーニョに話しかけている姿を見るのが好きだ。なんだかあたたかくて愉快的な雰囲気だからである。ニーニョを知った当初、カトリック教徒ではない私にとって、ニーニョが浮かべる微笑は不気味なものとしてしかうつらなかった。それゆえにニーニョを腕に抱えながら、周囲の人と同じように振舞うことは、とてもじゃないができなかった。しかし、世話人の家に毎日通い、ニーニョを自分の腕に抱かせてもらい、そしてニーニョを取り囲む人びとをみていくうちに、その不気味さは徐々に和らいでいった。それはおそらく、イエス・キリストを象徴する像であったものが、村の人びとの日常生活に欠かすことのできない、まるで人間のような存在としてニーニョが私の前に現れるようになったからではないかと考えている。

世話人夫妻や村人にとって、祭りを開催するのは大仕事であるし、私が初めてニーニョの祭りを見たときにはその盛大さや活気に感動した。しかしそういった祭りの背景にはこのようなニーニョと人びとの間に数多くの物語が存在する。その物語を知るたびに、私は嬉しくなるのである。



(写真8) 祭りでの一幕



（写真9）ニーニョを囲む女性たち